

# 良寛自撰詩集『草堂詩集』の構造

下 田 祐 輔

## はじめに

良寛が△草堂集▽という名の自作の漢詩集を手元に持っていたことは、夙に彼の在世中、文化十年前後には鈴木隆造・文台ら一部の知友に知られていた。にも関わらず、その頃成立し、流布した二種の良寛詩集（草庵本・鈴木本）は、再編集された他撰の詩集であり、良寛が自ら編んだはずの詩集そのままの形を伝えていないのである。いかなる理由にか、良寛自撰の詩集は世に出ることもなく、忘れ去られたのである。

今日、現存する自筆本『草堂集』貫華』あるいは『草堂詩集』こそ、その自撰詩集の草稿である。ところが、これらは一見したところ、甚だまとまりを欠き、完結した詩集の体裁をなしていないかの如くであることから、単なる自作の詩の手控えとして扱われ、詩集の構成について詳細な検討が行われることもなかった。

自筆稿本には、夥しい字句の推敲の書き込みに混じって、詩篇の挿入や削除を意図したと思われる書き込みが見出される。それに注意しながら各稿本の関わり、所収詩篇の排列等について『草堂詩集』天・地巻を中心として検討した結果、所収詩篇の排列は意識的になされたものであり、その排列は詩篇の内容に関わるものであることが明らかになった。<sup>(1)</sup>

小稿はそれを踏まえ、良寛の自撰詩集がいかなる構造をなしているかについて、さらに検討していきたい。

## 一 『草堂詩集（天・地）』所収全詩篇の排列

まずは、現存自筆稿本中最も編集が進んだ形を示している『草堂詩集』を中心に、詩篇の排列の仕方について、巻頭から順を追って検討することとする。

『草堂詩集』は天地人の三巻からなるとされるが、天地人の巻名

は後世付されたものであり、本来の稿本の関係を全く反映していないと考えられる。天巻と人巻とは同じ雑詩の集の草稿であり、人巻作成、推敲ののち、天巻が作成され、さらに推敲が加えられた。良寛自ら『草堂詩集』（天巻元表紙）と題した自撰詩集稿は、最終的にはいわゆる天巻（雑詩の部）と地巻（有題詩の部）とが組み合わされたものである。この二部構成自体は他撰詩集である草庵本・鈴木本にも継承されている。<sup>(2)</sup>

従って、本稿においては、天巻と地巻とによって構成される詩集を『草堂詩集（天・地）』と表記し、これを検討の対象とする。

詩集内における雑詩の部と有題詩の部との前後関係については、明確ではない。ただ、『草堂詩集』より早い段階の草稿である『草堂集』貫華』、また他撰の草庵本・鈴木本でも、一貫して有題詩の部を前に、雑詩の部を後に配していることからすれば、『草堂詩集』についても地巻を先に、天巻をあとに置くべきとも考えられる。この点、なお検討が必要であるが、今はこの順序に従っておく。

さて、『草堂詩集（天・地）』を、巻頭から排列に従って読んでいくと、数首乃至十数首ごとに内容上のまとまりが読み取れることに気付く。そこで、以下、そのまとまりごとに、個々の詩篇の内容と排列のなされ方との関係について、検討していくこととする。

作品番号は通行の『墨美』二二〇・二二三号のものに依拠<sup>(3)</sup>。そのため、地巻の冒頭は112から始まる点、本論の立場と食い違

が、紙面の都合上、詩本文の引用を極力省く必要があったため、検証の便宜を考慮したものである。『墨美』では、推敲の過程で行間に入れた詩篇のうち、全文が記されているものには本行と同様に通常の通し番号を与えている。ここではそうした挿入詩篇は作品番号に（ ）を付して示した。また、首句など、詩篇の一部だけを記して挿入を表している箇所については、私に（イ）・（ロ）・（ハ）……の通し記号を付した。削除の墨線が付された詩篇には×印を付した。訓点は全て私に付した。

① 有題詩の部（地巻）

112 「円通寺」	× 118 「信宿」
× 113 「分衛」	119 「宿玉川駅」
114 「伊勢道中苦雨作二首」	120 「再游善光寺」
× 115	121 「安永庚午秋余将還郷至厭川不預寓居……」
116 「秋夜宿香聚園早倚檻眺」	× 122 「還郷作」
117 「投宿」	123 「眺」

\* スペースの関係で上下二段とした。以下同じ。

円通寺（備中玉島）は、故国越後を後にした良寛が、師国仙のもとで本格的な修行生活に入った、禅僧としての出発点である。113「分衛」は「乞食行」の意で、古の仏者の道を我が道として修行に励む心を詠っている。この詩は最終的には雑詩の部に収められ、地巻か

ら削除される。続く114から121までは全て旅中吟である。良寛は印可を受けたのち、円通寺を離れ、諸国行脚に数年を過ごし、帰郷したとされている。121は題辭より帰郷途次であることが知られ、122・123は帰郷直後の心境を詠んだものである。

要するに、これらの作品群は、円通寺での修行時代から、諸国行脚、帰郷という順に並べられていることがわかる。

②

124 「今夕」	× 131・132 「余持鉢到新瀉逢有願老子說法白衣舍因有偈二首」
× 125 「和天華上人歲末被貽作」	× 133 「看花到田面庵」
× 126 「晝送左一」	× 134 「過有願居士故居」
× 127 「春夜与肱夢步月到田舎途中作」	135 「即事」
(ソ) 「藤氏別墅」	(136) 「左一大丈夫」
128 「左一赴至唱然作」	137・138 「有懷二首」
× 129 「上巳日游輪氏別墅有懷左一」	(139) 「鷗齋偶儻士」
(ツ) 「過一行上人故居」	140 「莫投閑閑舎」
× 130 「有二僧論經優劣移時因偈有」	(ネ) 「藤氏別墅」
	* 136～139で「有懷四首」となる。

124から140までの詩篇は全て、天華上人・左一・有願といった、知友との交情を詠んだものという点で明らかに共通している。この内容の共通性は、これらの詩群の間に挿入の指示がある詩篇(ソ)・(ツ)・(136)・(139)・(ネ)もすべて、これらと全く同じ内容の共通

性を有するという点から、さらに裏付けられる。

③

141 「絶句」	× 144 「芭蕉夜雨作」
142 「行春」	× 145 「秋夕」
143 「子規」	× 146 「寒夜」

141～146は、題からも分かる如く、季節感の色濃い作品群である。これらは春夏秋冬の順に排列されている。但し、144以下の三首は如何なる理由にか抹消されている。

④

147・148 「観音二首」	153 「托鉢」
149 「布袋」	154 「秋夜翫月」
150 「靈照女」	155 「芳草歌」
151 「渡唐天神」	(キ) 「古意」
× 152 「笏」	156・157・158 「翫珠吟三首」
(ナ) 「雪」(ラ) 「蓮」	159 「唱導詞」
(ム) 「子規」(ウ) 「移居」	160 「落髮」

147～152の詩篇は、みな、題に掲げた人物またはものについての賛仰・賛美の意を詠んだものである。そのうち、150と151は、画賛であることが内容より明らかである。賛美・賛仰の対象は、全て仏教に関わるものである。

なお、152の余白に書き込まれた四つの題辭のうち、「雪」「移居」の両詩は該当作品未詳であるが、「蓮」「子規」はいずれも題に掲げた物に対する賛美の意をこめた作品であり、「蓮」は仏教に関わっ

ている。

153から160までの詩篇も仏教思想の強い称揚の意が込められたものである。154は、秋夜月を賞翫しつつ、曹溪・普願・薬嶂といった禅者達の月の故事に思いを馳せ、しかしそれは遠い過去のこと、今日彼らの禅風に接することは出来ない、と嘆ずる。そして次のように結ぶ。「我亦従来多<sup>シ</sup>古意、此夕弄<sup>シテ</sup>月一<sup>ヲ</sup>霏<sup>ニス</sup>衣<sup>ス</sup>」。155は「芳草」を摘んで「所思」に陥りたいが、遠く山河を隔て、ままならず、涙にくれる、という薬府調の作品。表現上仏教色は全く無いが、154とモチーフの共通要素がある。あるいは154の意味合いが寓されていたとも考えられる。(牛)に挿入される「古意」も155と同工異曲の作であり、「古意」という題からは、直前の154とのつながりが感じられる。

⑤

161・162「病中二首」 (ノ・オ)「古意二首」 ×163「病起」 (ク)「聞之則卒」 164「逢賊」	(ヤ)「偶作」 (マ)「有感」 (ケ)「空盞」 ×(フ)「移居」 165「備作」 (ヨ)「旧隠」 (エ)「空盞」
--	---

161・162は、病の床に臥しつつ、作者の「知音」即ち左一、有願、大忍の相次ぐ逝去を嘆じている。163はそれに続く内容。164は盗賊に入られてわびしいさま。165は「衝天ノ志氣」を抱いていた昔に引き較べ、貧寒とした今の境遇を嘆じる。これらはすべて、悲嘆沈痛の情、嘆息まじりの述懐を主なモチーフとする。ここに挿入されてい

る各詩篇も全く同様である。なお、(ヤ)「偶作」は、⑦の連作詩篇を指すのではなく、草庵本並びに鈴木本に、同じ「偶作」題で連作詩篇とは別に載せる「可<sup>シ</sup>嘆<sup>ク</sup>世上人心<sup>ノ</sup>險<sup>ナ</sup>、不<sup>レ</sup>知<sup>ル</sup>何<sup>レ</sup>処<sup>ニ</sup>保<sup>ツ</sup>生涯<sup>ヲ</sup>、夜夜<sup>ノ</sup>前村<sup>ノ</sup>打<sup>ツ</sup>鼓<sup>ヲ</sup>、盗賊<sup>ノ</sup>徘徊<sup>ス</sup>百有<sup>レ</sup>余<sup>ト</sup>」の詩を指すと解すべきであろう。

⑥

166・167「乞食二首」 (テ)「乞米」 168「勝騰」	169「穉子」 170「鬪草」
-------------------------------------	--------------------

自由に満ちた乞食僧の生活、特に托鉢の途上での児童との遊戯を描く。すべて絶句である。

⑦

171~176「偶作七首」 (171の後に(ア)「国上山下是僧家」)

「偶作」は、七言八句の詩六首(アは四句)からなる、良寛の禅思想の本領を示す連作詩篇であり、稿本中、最も重量感のある連作詩篇である。到達した境地から、浮薄な人心、仏教の墮落を非難し、道を説くが、その言辞は苦汁に満ちている。

なお、偶作七首の次に書かれている「早秋作」「題藤氏別墅」「古意」詩は、全て削除の墨線が施されている。そのうち、後の二首は地巻の他の位置に挿入の指示があることから、一旦巻末に書付けられたのち、然るべき位置に移動されたと解される。「早秋作」は他の位置への挿入の指示はなく、集中から削除されたと解される。従って、有願詩の部の巻末はこの偶作七首ということになる。

(二) 雑詩の部(天卷)

雑詩の部に於ける詩篇の排列は、有題詩の場合と同様、詩篇の内容に関わっていると看取される。「雑詩」と総題されたこれらの詩篇は、題に規定されず、所懐や思想を述べた無題詩であり、内容は多岐に亘る。前後に相接する詩篇との内容の関連の上では、いろいろな要素が複雑にからみあっているように見受けられる。以下、巻頭より順を追って検討する。

⑧ 1 「我有一張琴」・2 「痛哉三界客」

1 「我有一張琴」・2 「痛哉三界客」は『貫華』の雑詩の部、並びに『草堂詩集』の人巻・天巻ともに巻頭に置かれている。巻頭詩として位置づけられていることが明確である。

1の詩をはじめとして、良寛がしばしば詩に詠む「琴」の音は、自らの到達し得た悟境の寓意である。1では、我が琴の音は天地に満ち渡り、天帝を右往左往させるといふ。自らの絶対的境地に対する確信、正当性への自負が込められている。2は、三界を浮沈・流転して休むことのない衆生への痛切な思い。この両詩に示された二つのテーマが、以後連ねられる詩篇の主調をなすかの如くである。

- ⑨ 3 「自参曹溪道」
- 4 「昨日出城市」
- 5 「負新下西岑」
- 6 「宅辺有苦竹」

- 7 「青山前与後」
- 8 「千峯一草堂」
- 9 「寂寂春已暮」
- 10 「我有拄杖子」
- 11 「人生一百年」
- 12 「吾師来东土」
- 13 「天气稍和調」
- 14 「壮年擲筆硯」
- 15 「我自住箇裏」
- 16 「依稀(藤)蘿月」
- 17 「東風吹時雨」
- 18 「一鉢千家飯」

これらの詩篇に共通するのは、「草堂」即ち世俗から隔絶した空間における、孤独・清貧の修行生活の有様を描写しつつ、信条や折にふれての所懐を詠じたもの、という点である。次の如くである。

「自参曹溪道、千峯深閉門、藤纏老樹枯、雲埋幽石寒、拄杖朽夜雨、袈娑(袈)糜(粥)晚烟、無(人)問(消息)、年年又年年」

(3)

11・12・13・14の四首は、いずれも古えの仏者への賛仰が詠まれている点で共通する。「牟尼辞高貴、為(度)彼沈淪(牟尼)釈迦」(11)、「吾師来(牟尼)東土、非(是)小小(牟尼)緑、(吾師)はこの詩では達摩を指す」(12)、「従(事)古佛跡、次第(乞)食行」(13)、「壮年擲(筆)硯、竊慕(出世)人(出世)人(悟)りを開いた人」(14)という如くである。これらは作者の精神的支柱であったに違いない。

- ⑩ 19 「陽春(三月)」
- 20 「可(怜)美(少年)」
- 21 「尋(思)少(年)日」
- 22 「清(歌)采(蓮)女」

この四首は、古楽府風の華やかな表現を用いた作品である。天卷

が書かれた当初は19詩と21詩が連続して書かれたが、(20)詩と(22)詩がその行間に挿入され、右の四首が並ぶこととなった。このうち、(22)詩は、最終的には削除されている。四首の表現上の共通性は明らかであり、これらの排列はその点に関わると考えられる。

23 「宇内有其人」	(イ)「寒燼深灰」
× 24 「素索五合庵」	× 29 「四大方不安」
× (25) 「苔径花如霰」	30 「昨日之所是」
× 26 「城中乞食休」	31 「家有猫与鼠」
27 「金罇游佚子」	× (ロ)「富家不忍費」
28 「心水何澄澄」	

24、26は⑨の詩篇群と同様、山庵暮しの所懐であるが、塗抹・削除されている。

27以降は、主として、世人の誤った考えを指摘し、正す、という内容の詩篇が並ぶ。29は病臥の悄然たる心情を吐露した詩であり、イの挿入もこの詩との関連からと考えられるが、29は集中から削除される。

32 「憶在円通時」	× 38 「冥目千嶂夕」
33 「檻樓又檻樓」	× 39 「閑上無量閣」
34 「終日乞食楮」	(ハ)「仲冬十一月」
35 「大哉解脱服」	40 「珊瑚生南海」
36 「一路萬木裏」	41 「三越多佳麗」
37 「手把兔角杖」	

32は、円通寺での懸命の修行の昔への回顧。つづく33は寺を出てからの所懐である。「自<sub>リ</sub>出<sub>テ</sub>保<sub>シ</sub>社<sub>ヲ</sub>、錯<sub>テ</sub>爲<sub>シ</sub>齋<sub>ノ</sub>廢<sub>ノ</sub>獸<sub>ト</sub>」、円通寺を出てから、自分は誤ってこんな馬鹿者になってしまった、というのである。円通寺修行時とその後、という点で両詩はつながっている。

34からあとは、また、山庵独住の所懐や信念を述べた詩がしばらく続く。  
40「珊瑚生南海」は「伊昔少壮時、飛<sub>バン</sub>錫<sub>テ</sub>千里<sub>ヲ</sub>」と行脚修行の昔を回顧しているが、その直前に挿入された「仲冬十一月」詩も「昨游都作<sub>レ</sub>夢<sub>ト</sub>」と、同様の回顧の情を述べ、両詩はここに接点を有する。

要するにこれらの詩群は、寺院から逸脱せざるを得なかった自らの個性的な生き方に思いをいたすものである。34に「爐<sub>ニ</sub>燒<sub>キ</sub>帶<sub>リ</sub>葉<sub>ヲ</sub>枝<sub>ヲ</sub>、静<sub>ニ</sub>吟<sub>ニ</sub>寒<sub>ニ</sub>山<sub>ノ</sub>詩<sub>ヲ</sub>」とあり、36・37は寒山詩の趣が濃く感じられることから、その背後には寒山などの姿もあるかもしれない。

41は前後の作品とめぼしい関連性が読み取れない。ただ、40の「珊瑚生<sub>ニ</sub>南海<sub>ニ</sub>、紫<sub>ハ</sub>芝<sub>ハ</sub>有<sub>リ</sub>北<sub>ニ</sub>山<sub>ニ</sub>」といった明るい色彩感、42の「八月涼氣至<sub>ニ</sub>」といった季節感が、41の「南国多佳麗」「南国」を「三越<sub>ニ</sub>」に改める。以下の表現と響きあうことが感じられもする。

42 「八月涼氣至」	45 「富貴非我願」
43 「行行投田舎」	× (ニ)「中秋三五夜」
44 「草蟲何嘒嘒」	

この四首は、明らかな内容の連続性が読み取れる。42詩、さわやかな秋となり、心の赴くに任せ、山中の草庵を飛び出していく。43詩、行き行きて夕刻の田舎に投宿し、素朴なもてなしをうける。44詩、その田舎の夜ののびやかな団欒に感じ入る。この三首の内容は時間的・空間的にも連続している。45詩は前の三首と場面上のつながりはないが、「富貴非<sup>ハズ</sup>我<sup>ガニ</sup>願<sup>ニ</sup>、神仙不<sup>カラ</sup>可<sup>ス</sup>期<sup>ス</sup>、瀟<sup>タセ</sup>腹<sup>ベラ</sup>志<sup>ラ</sup>願<sup>ル</sup>足<sup>ル</sup>、虚<sup>フルニ</sup>名<sup>ヲ</sup>用<sup>ヒ</sup>何<sup>カ</sup>為<sup>ス</sup>」という、その所懐の内容は、前三首と一貫するものであり、前三首を総括することとなっている。

⑭

(ホ)「苦哉三界子」	50 「群賢高会日」
46 「我見行脚僧」	51 「余郷有一女」
47 「嗟見講經人」	×(ト)「富家不忍費」
(ハ)「孤鶴摩九霄」	52 「伊昔東家女」
48 「言語常易出」	×(53)「富家不忍費」
×49 「我見後生子」	54 「窮谷有佳人」

これらの作品は、世人に対する批判、勸戒を内容とする。その意は、48の直前、つまりこの詩群の最初に挿入され、総括的な意味あいをもつ「苦哉三界子」詩によって明確な方向性を与えられる。(ホ)「苦哉三界子、早晚歇頭<sup>ノ</sup>辰、不知箇<sup>ヲ</sup>中<sup>ノ</sup>事、永劫狂<sup>ラ</sup>苦<sup>シ</sup>辛<sup>シ</sup>」即ち、世の中の人は「本来の事」を悟らぬためにいつまでも無駄に苦しい思いをするのだ、ということである。以下の詩はその具体的諸相とすることができ。なお、46のあとに挿入が指示されている(ハ)「孤鶴摩九霄」は、生き物がみな心得ている本来のあり方を解しな

い愚かさを、「盛饌供鷄鶻」の喩えによって批判するものであり、前後の一連の詩篇の主題と軌を一にしている。

47は「本来事」を悟り得ていない「講經人」の「雄弁」のさまが批判されるが、ここから「言語」の問題が前面に出て来る。48は「言語常易<sup>ハニクク</sup>出<sup>ク</sup>、理行常易<sup>ハニクク</sup>虧<sup>ケ</sup>」と、実質の伴わない言葉の問題が取り上げられる。49では詩作態度に関して、50では詩の合評の場面に即して、同様に中身の伴わない言葉の使用に対する批判を叙べる。

51「余郷有一女」・52「伊昔東家女」はいずれも容姿に恵まれた女性の悲劇的な末期を寓話的に描いた作品である。人間にとって本当は何が大切なのか、という問いを暗に投げかけていよう。

53もやはり女性が描かれているが、これは前の二首とは対照的に、己のあり方に対する矜持と自嘲とを込めた自画像を寓意するものと考えられる。

⑮

55 「在苒歲言暮」	60 「今年非去年」
56 「清晨且独行」	61 「肅肅天氣清」
(チ)「夢裏無城市」	62 「孟冬沖十月」
×57 「落髮為僧伽」	×(ヌ)「仲冬十一月」
58 「永夜高堂上」	63 「孤峯獨宿夜」
(リ)「自從出家」	64 「天氣稍和調」
59 「嗟俗之孤薄」	

これらの詩篇は、山庵独住の所懐であるが、雑詩の部の前半の詩群に対して、悲哀・寂寥・悲憤といった感情に満ちている点で趣を

異にする。また、これらは、全体として秋・冬の色彩が濃く、前半の春の色彩が濃い作品群と対照的である。このうち、60詩から64詩までの五首は、所懐の内容、季節・場面などの点で特に緊密な連続性を示していることを前稿で指摘した。

⑬

×(ル)「澆風自蕩序」	68 「誰家不喫飯」
65 「古仏留教法」	69 「誰家不喫飯」
66 「過去已過去」	70 「晋陽二月初」
67 「誰家不喫飯」	

これらの詩篇のうち、65・67・68・69の四首に共通して「自知」の語が用いられている。「自知」は『景德伝燈録』四、蒙山道明章に「今蒙指授入処、如人飲水、冷暖自知」とあり、また『無門関』第一、趙州狗子に「如啞子得夢、只許自知」の語がある。悟りの境地は、飲水や冷暖や啞子の見た夢のように、自身で体験し獲得した者が自ら知るだけであって、他人には説明できないものである。65「古仏留教法、為令二人自知、荷人自知了、古仏何所施」と詠まれている「自知」の語は、そうした悟りの絶対境を、(言葉を通じて分かったつもりになるのではなく)自らが真に体得すること、という意味が込められていよう。その必要性を述べたのち、「取真真却妄、了妄妄即真、真妄両名言、取捨因執存」と、言葉に拘る愚かさを批判する。続く66では、65と同内容の批判を「許多閑名字、竟日強自為」と述べ、更に、そこからの脱却の法を説いて

いる。67と69の三首の連作では、「誰家不喫飯、為何(什・甚)不自知」の如く、同じ措辞を繰り返し用い、「自知」することの重要性を説いている。70は、児童と手毬つきに夢中の「我」に通行人がなぜこんなことをしているのかと問いかけるが「低頭不応他」、そしてその心は「道得亦何似、要知箇中意、元來祇這是」だ、と結ぶ。手毬つきに興ずる心はこの場合、「他人には語り得ぬ、自ら知るだけ」なのであって、しかもそれは結びの二句にも示唆される通り、正しく「自知」した者の境涯なのである。

以上を要するに、これらの詩篇群は、「自知」をテーマとしたものといふことができる。

⑭

×71 「人心各不同」	×(ヲ)「城中乞食籠」
72 「人心各不同」	74 「夜夢都是妄」
73 「第一欲參他」	75 「道安一切妄」

71・72・73は「是・非」、74・75は「真・妄」ということばの相対性に採われ、道を見失うことの愚と、そこから抜け出る法を叙べる。

⑮

76 「終日望烟村」	×(フ)「大忍俊俗子」
77 「生涯懶立身」	×(カ)「苦憶有願子」
×78 「可怜美少年」	×(ヨ)「鷗齋獨儻」
×79 「柳娘二八歳」	80 「静夜草堂真」



×(81)「寒爐深撥灰」

82「八月初一日」

76・77は乞食僧としての生活の所懐である。それに続いて78「可  
怜美少年」・79「柳娘二八歳」の二首がある。これらは先の㊸の詩  
篇群と同様、古楽府的な作品であり、直前・直後の詩との内容上の  
関連性が見出し難い。ちなみに78は㊸の箇所に移動・挿入され(21)、  
79は集中より削除されており、その結果、その後が続く80・82との  
連続性が前面に出て来ている。(80・82の間に(81)「寒爐深撥灰」  
が一旦挿入されたのち、別の箇所に移動されている。)76・77・80・  
82の四首とも生活の所懐であり、時間、場面の推移(夕↓夜↓朝/  
烟村↓草庵裡↓市塵)の点に於いても、連続性が存する。

①9

83 「人生浮世間」	88 「迷悟相依成」
84 「文殊乘獅子」	89 「仏説十二部」
85 「仏是自心作」	90 「十方仏土中」
86 「我哲學靜慮」	91 「此有一顆珠」
87 「孰謂名実贅」	92 「記得在年時」
(夕) 「因指見其月」	93 「自白馬建基」

83は、了悟しないために永遠に苦しみ続ける三界子に対して、諸  
君は何を拠り所とするのか、という呼びかけ。以下、思想を説き且  
つ勸戒の意を込めた詩篇が並ぶ。87では名と実、挿入される(夕)で  
は月と(それを指す)指、88では迷・悟といった区別が、それぞれ  
相対的な観念に過ぎないのであり、拠るべきものではないことを叙

べる。そして、88「竟日無字經、終夜不修禪」、89「仏説十二部、  
部部皆淳真」、90「十方仏土中、一乘以為<sup>テ</sup>則」と、真に拠るべきも  
のとは何かが示唆される。更に、90で「一乗ノ法」を、『法華經』  
五百弟子受記品に拠る「衣内珠」に喩え、続く91・92でも「一顆珠」  
「衣内宝」と同じ題材を扱った詩が連続している。93は經典が行  
き渡った中国に達磨がやってきた意義を、「提示仏心印、直下令人  
了」とするが、この「仏心印」は「衣内珠」と重なるであろう。要  
するにこれらは、本当に拠るべきものは何か、ということ説いた  
詩篇群であるといえる。

②0

94 「南山有梧桐」	96 「憶得鶴林寺」
95 「五月采蓮女」	× 97 「自澆風蕩淳」
(レ) 「寒爐深撥灰」	

93では「吾師」達磨西来によって仏法の本質が伝えられた功績を  
讃えたのであるが、94以下は、その本質が今日殆ど忘れ去られ、容  
易にそれに触れることができない、という痛切な思いを述べる。94  
は、「白雲琴」の音は響きわたるが、この音を聞き分ける「知音」  
が稀であることが恨みである、という。先にも触れたように、琴の  
音は悟境の寓意である。96はかつて「鶴林寺」での雲水達の懸命の  
修行ぶりは本質的であり「古仏会」と賞賛されたが、「嗟不<sup>カラ</sup>可<sup>ク</sup>復<sup>タ</sup>  
視<sup>ル</sup>」と慨嘆する。97は「澆風(軽薄な風俗)」がかつての人心の淳

樸さをすっかり吹き払ってしまったことへの嘆き。いづれも、大切なものが失われ、今は容易に接し得ないことへの深い慨嘆という点で共通する。95は李白の「採蓮曲」をデフォルメした作品であるが、あるいは、前後の作品と同様のモチーフを含蓄するかもしれない。

× 98 「自從出家後」	104 「鴛巢喬木類」
× 99 「我見一癡漢」	105 「無欲一切足」
100 「爰有一類子」	106 「家住深林裡」
101 「余鄉有兄弟」	107 「作善者升進」
102 「丹郎当路日」	× 108 「好箇拄杖子」
103 「伊昔勝遊処」	

㉑の詩群に於ける慨嘆の情をそのまま受けて、浮薄な世間人のありさまに対する痛罵、及び勸戒の詩が並ぶ。108「好箇拄杖子」のみ内容が異なるが、この詩は抹消されている。

109	カフガガワト 孰謂我詩詩	我詩非 <sub>ニ</sub> 是詩 <sub>一</sub>
	テノザルコトラニ 知ニ我詩非 <sub>ニ</sub>	メテシニフヲ 始可ニ与言詩
		(全文)

109詩は、独自の詩作の姿勢の表明である。全詩作を総括するが如きその内容は、詩集を締めくくりに極めて効果的である。

なお、110・11詩は、筆跡がそれまでとはやや異なり、いくぶん小さな字で手早く書きつけてある上に、削除の墨線が付されている。

そのうち、110詩の方は、40詩の直前に挿入されている。要するにこれらは巻末の余白を利用して書付けられたに過ぎず、排列上の意味はないと解される。従って、天巻の巻末は「孰謂我詩詩」詩であると認められるのである。

## 二 『草堂詩集(天・地)』の構造

良寛自撰詩集『草堂詩集(天・地)』の所収全詩篇について、排列と詩篇の内容との関わりについて検討した。個々の詩篇の内容に従った排列が詩集全体に亘ってなされていることが確認された。

排列にあたっては、詩篇の主題・内容が共通あるいは関連する作品を、纏めて配置するという方法が採られている。そのために、詩篇群というべきまとまりを、排列に従って読みとることができる。但し、このまとまりは、あくまで、排列された詩篇の内容から読みとれるということであり、稿本上に、部立のような題がつけられているでないことは勿論の事、その区切りを示すいかなる目印も付されていない。

詩篇群内の詩篇の排列は、概ね、相接する前後の詩篇との内容上の関わりに細かに配慮したあとが認められる。例えば、①②③④⑤の各詩篇群は、時間の推移あるいは場面の展開に沿って排列されている。これに類似したことは、陶淵明の一部の連作詩篇においても指摘されている<sup>(8)</sup>。但し、『草堂詩集(天・地)』の所収詩篇の殆ど

は、最初から連作されたのでもなく、また一定の部立に従って作られたものでもない。心の欲するままに折々に詠じられたものが、再構成されたのである。ことに雑詩は題に捉われない自由な詠草であり、これを集めた上で、内容に従った十全な排列を施すことは多少の無理を伴うはずである。そのためであろうか、排列上、整合性を欠くように感じられる部分もないわけではない。稿を改める度に幾度にも大幅に排列を変えた稿本が書かれたのもそうした事情によるのかも知れない。

ともあれ、詩集全体に亘って、内容本位の細やかな排列が企てられていることは、漢詩集においては他にあまり例を見ないように思われる。

こうした排列の工夫は、部立などの明示を一切せず、いかにも目立たない形で行われている。だが、排列に従って一篇一篇を順に読んで行けば、自ずから作者の託したメッセージを読みとることができるのである。即ち、連続する詩篇との関わりにより、個々の詩篇の主題がより明確に浮かび上がり、或いはイメージがより強く印象づけられるのである。

各詩篇群の順がいかんにして決められたか、また、その順序にいかなる意味が存するかということについては、『草堂詩集(天・地)』に先立つ草稿本であり、『草堂詩集(天・地)』とは排列が大きく異なる『貫華』・『人卷』等との比較検討が必要と考えられる。それ

については稿を改めて論じることとしたい。

### おわりに

本稿で提示した二十二の詩篇群の区分は、一つの素描的な試みに過ぎない。排列に則した一篇一篇の詩の関わりには、作者の微細な意識の働きが読みとれる部分が少なくない。それをひとつひとつ解明していくことによって、良寛がその完成に心血を注いだはずの自撰詩集『草堂詩集』を一個の作品として見る事が、はじめて可能となってくるであろう。

また逆に、個々の詩篇の解釈にあたり、作者の表現意図に忠実であらうとするならば、その詩篇が自撰詩集の中でいかなる排列上の位置を占めているかということの吟味が不可欠となろう。

引続き、考究に努めたい。

### 注

(1) 「良寛自筆詩集における編集意識——『草堂詩集』を中心に——」(『広島大学文学部紀要』第五三卷 平成五年(二月))

(2) 各自撰詩集稿本の関係については、拙稿「良寛詩集系統序論(上)——自筆稿本『草堂詩集』について——」(『国文学』一二

五号 平成二年三月)「良寛詩集系統序論(中)——貫華系テキスト・流布本系テキストと『草堂詩集』との関係——」(『国

文学攷』一二九号 平成三年三月) 「良寛詩集系統序論 (下)

——二系統の流布本について——」(『国文学攷』一三五号 平成四年九月) を御参照いただければ幸いである。

(3) 昭和四六年五月・八月、墨美社刊。

(4) 靈照女は龐居士の娘。渡唐の天神は入矢注によれば、「菅原道真の神格化と天神信仰の流布に伴い、鎌倉期から禅僧の間で、その画像を宋元画の様式で描くことが始まった。唐服をつけ梅の小枝を手にする。」という。(入矢義高『日本の禅語録二

○ 良寛』昭和五三年 講談社)

(5) ちなみにこの詩の第五・七句の推敲前は「鉢香摩詰飯、心抛難陀米、従事迦葉跡」である。

(6) 24・25は地巻の方に収録されることとなった。26は流布本における入集状況からみて、削除が取り消されたようである。

(7) (1)に同じ。

(8) 都留春雄・釜谷武志著『陶淵明』(鑑賞 中国の古典一三) (昭和六三年 角川書店)

附記 本稿は、平成元年一月提出の修士論文での着想をもとにして  
いる。修士論文以来、格別の厳しくまた温かい御指導・御鞭撻  
を頂いている米谷巖先生の御恩に対し、衷心より深く感謝申し  
上げますとともに、先生の益々の御壮健を心よりお祈り申し上  
げます。